

道徳授業の「落とし穴」③

～「手法におぼれる」～

土田 雄一



1. 「落とし穴」から授業を改善する

「落とし穴」は授業改善の視点でもある。今回は指導方法（手法）に焦点を当てる。

2. 答申の改善点から「落とし穴」にはまる

最近、「グループ活動」を取り入れる道徳授業がしばしば見られる。それにより、子どもたちがさまざまな視点に気づき、高め合い、全体を通して深い学びになる授業もある。その一方で、「形式的グループ活動」により、話し合いが「ただ伝え合うだけのもの」になっている授業も少なくない。また、「なんのためにグループで話し合わせたのか」を教師自身がよくわかっていないケースにも出会う。このような指導方法・手法活用の「落とし穴」とその対策について述べる。

⑤「手法」におぼれ、本質を見失う授業。

10月に出された「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」（中央教育審議会）では、「道徳の教科化」「検定教科書の導入」のほか、改善点として「多様で効果的な指導方法の積極的な導入」を挙げている。これは、道徳の時間に「登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導」や「分かりきったことを言わせたり書かせたりする授業」があることへの指摘である。

そもそも指導方法改善の指摘は今回に限ったことではない。「多様な指導方法の導入」はこれまでも指摘されていたのである。中でも現行の学習指導要領では「言語活動の充実」が重点となり、道徳の時間でも「話し合い活動」を多くしようと考える教師が増えた。

今回の「落とし穴」にはまる教師は、とても期待ができる教師でもある。どのようなパターンがあるか。

pattern①「ワンパターンだといけない」と新しい手法をとり入れる。

pattern②「言語活動」が大事だからと（やたらと）「グループ活動」を入れる。

では、このような「落とし穴」にはまらないためにはどうしたらよいのだろうか。

3. 対策①「ねらい」はなにかを考えると

この「落とし穴」にはまりやすい教師は、「道徳授業を充実・活性化させたい」と願っている意欲的な教師である。そこで、学んだ「手法」を試してみようと試みる。例えば、「スケーリング」や「ウェビング」「ランキング」等の手法を活用しようとする。しかし、その手法が資料や児童の実態に合わず、授業が上滑りに進むことがある。残念ながら、「子どもたちが自分の心を見つめ直す道徳の時間」が「手法を活用するための道徳の時間」になってしまったのである。「ねらいを達成するためにふさわしい手法か？」とねらいとの関連から手法を検討する必要がある。

4. 対策②「子どもの意識の流れ」を考える

道徳授業は、子どもたちに考えてほしいねらいを達成するために行う。その願いのもと構成されるはずの授業の目的が、「言語活動充実のため」では、本末転倒である。本質を見失った授業になる。子どもたちの意識の流れを考えた上で、「手法」や「活動」を選択するべきである。常に「ねらい」と「子どもたちの意識の流れ」を考えて手法を選択したい。

5. 対策③「本当に必要（効果的）か」を自ら問う

前述のパターンにはまらないためには、資料を「ねらい」と児童の実態から考え、これでよいか「自問」する習慣を身につけたい。（この資料で）「ねらい達成のためにこの手法（活動）は効果的（必要）か」と自ら問い直すのである。「なぜグループ活動を2回行うのか」「それは必要か」「全体的話し合いは？」等を自分に問い、セルフチェックすることが大切である。

6. 「形に目を奪われず本質を見よ」

新しい手法やグループ活動は、新鮮で魅力的である。答申でも求めている。しかし、その形式に目を奪われ、本当に大切なものを見失うことがある。それは、「ねらい」に対しての「発問」である。子どもたちの意識に切り込む発問と資料（教材）と手法がマッチしてこそ、よい授業ができる。